～バンコク週報より～

日本人僧侶

新米プラジープン

プラスチトー松下
パクナム寺・元短大教授

僧侶生活のなかでの失敗例

（二〇〇二年八月十六日～二十二日号）

短期出家だからといって二百二十七ある戒律のいくつかは守らなくてもいいということはない。少年僧（サマネーン）は十の戒律を守るだけでいいし、尼僧（メーチー）なら八戒律でいい。しかし、一般僧侶の場合、そうはいかない。私がつけている日記には、戒律に関する話題が少なくない。

二〇〇二年五月三十一日（土）

この一ヶ月間のトラブル・失敗例としては、合掌返し事件、そば捨て事件、正装姿で道路のポストに行った事件、下着の不着用事件、自室の仏像を移動させた事件、若い僧へ文句を言った事件などがある。

これらはすべて他の僧から注意されたものだ。「合掌」は僧侶から信者や一般の人にしては絶対にいけない。しかし返礼や感謝の気持ちを示すためについしてしまった。「食事」はすべて食べないといけない。必要な量を共通のスプーンで取り、たとえ美味しくなくとも、残したり捨てたりしてはいけないのだ。

「正装姿」で寺の中ならともかく、人目につく場所に行ってはいけない。その場合には外出姿に着替えなければならない。寺の中の姿（授業や瞑想会にいく際の格好）でもいけない。また、「内衣（上下）」は自室及その周辺、ないし外の仕事の時でも必ず着用することが必要だ。

「仏像」は置く位置や方角が決まっている。部屋の窓から雨が降り込んでくるので模様替えをしたが、置く場所が正しいかどうか自信がなかったので、先輩僧に聞きに行ったところ、やはり間違っていた。また、たとえ相手が「若い僧」であっても、文句や注意を感情的に言ってはいけない。一日でも早く出家したら年齢・学歴・国籍は関係なく従わないといけないのだ。私の場合、相手は外国人の僧侶であった。

それ以外に指摘されたことはないが、無意識のうちに戒律に触れていることもあるかもしれない。

食事以外では女性との関係が特にやかましい。物の授受や話題、部屋への招き入れ、席などいつも気をつけないといけない。タイ人女性は相手が気をつけてくれる。しかし外国人は無関心なのでこちらが神経を使うことになる。

戒律や生活にまつわる大きな事件はパクナム

寺ではあまり聞かない。私がここに書いた「戒律違反事件」はまだ雛の事件なので、その後で懺悔をしてすましている。

戒律のなかでもっとも重要なものは「殺さない」ということである。部屋のなかの蟻や蚊を追い出すのは一苦労だ。何匹かは無意識に偶然に踏んで殺してしまうことがあるので、この時も懺悔が必要となる。なお、懺悔は朝夕の祈りの時に毎日二人組で行う。

そのほか、戒律ではないが、タイ式座り方、仏教儀式の際の祈り方、黄衣の着方、座ったままの食事の仕方は、暑さや生活環境が違うので慣れるまでは苦労が絶えない。しかし元パクナム寺で学び、留学僧を沢山育てている横浜・善光寺の黒田住職によれば、「宗教は理想であり、人間の最も美しい姿と心を教えています」(留学僧育英会論文集VOL14)とのことである。

次号は「何故私が出家したか」を少し具体的に紹介する。

新米日本人僧侶の心の変化

（二〇〇二年九月十五日～十九日号）

出家後一か月で少し慣れ、二か月で何とか慣れ、入安居に入った。そして、その後どうなったかといえば…。

衣食住そして学が保証された寺での生活、それも灼熱の異国タイでの生活で、何を学び何を感じ、また何を得る事ができたのだろうか。

振り返ってみると、出家以前はバラ色であった。準備に充分時間をかけ、出家式（得度式）が大きな山場となった。そしてそれはうまくいった。

しかしそれ以降が大変だ。パクナム寺ではタ

イ人高僧をひとり知っているだけで、私以外日本人はいない。僧坊のある建物は外国人ばかりで英語が共通語、その上皆が三―八年といった古参。指導してくれる先輩僧や修行の相談者がいない。それでも、チベットから来た僧（ロシア国籍）が生活面のアドバイスをしてくれるので助かった。しかし言葉はタイ語がダメ、英語も少しのため余りコミュニケーションができない。だが勘がよく、仏心ももった親切な僧である。

ある時、「人間関係を広げるためには日本語講座を主催したらよいのではないか」と思い立ち、出家して半月ほど経ってからスタートしてみた。カンボジア、ネパール、タイ人の四名が口コミで申し込んできた。しかしその後だんだんと仏教大学の勉強が忙しくなり、一人二人と減っていった。私のタイ語の勉強にもなるのだが、人より日本語のレベルが違っていたため結局は収拾がつかなくなり、教えるというのではなく日本語サロン風にした。私の方でも、寺にいる誰でもがタイ仏教とタイ語の先生である、との認識に切り替えることにした。

パクナム寺での仏教の授業は専門語や固有名詞が多く、辞書もなく、タイ語・英語の辞書をやっとの思いで探した。「テーラワーダ仏教は簡単にはわからない。二年はかかる」と、前に居た日本人僧侶と比較され、度々授業で言われるのでまたまた落ち込む。三人の先生がすべて、タイの仏教を勉強に来ている日本人の私に親切ではあるが、特別扱いをするわけではない。毎週あるテストの時間中、本を見て答案を書くことを許可されているくらいのものだ。

ただ日本の宗教の悪口（戒律が甘い、など）を比較論で言う先生もいる。ほぼ事実のため反論できないが、ただタイ人僧侶は日本の仏教事情を知らなすぎる、という面も否定できない。

私がどこまでタイの仏教を理解できたか。その勉強の成果を早く論じたいものだが、ここではタイ仏教の良さを三点だけ強調しておく。

1、「仏教が社会・国家の規範になっている」。国旗の三色が意味する「国王・仏教・国家」がそのことを如実に表している。

2、「僧侶は良く勉強をしている」。特に原点（戒律・法）を忠実に守っている。

3、「お寺がその地域の中心になっている」。心の拠り所でもあるのだ。

「外国人がタイの仏教を分かるのか」とつぶやいたタイ人女性がいた。しかし、国際的な宗教である仏教は、もっともっと広く開放・拡大すべきではなかろうか。ただ「チャー・チャー（タイ語で『ゆっくり』の意）」と。

将来タイ人以外の外国人が僧伽（サンガ、二派ある）のメンバーなどに進出してくる可能性もあるし、尼僧の地位が向上したり（すでに外国人僧寺や尼僧寺がある）、また僧侶が政治に参加したり、社会事業によりかかわるようになれば、その評価そして我々との距離も変わってくるだろう。

もちろん日本の仏教の国際化（インドには著名な日本人僧・佐々井秀嶺）がいる）、またタイなど諸外国との仏教交流（六月末、曹洞宗は初めてタイとの仏教交流を実施した）が強く求められるのは言うまでもない。

そんな夢を持ちながら今はただひたすら有り難く学ばせてもらっている。

パクナム寺の献血奉仕活動

（二〇〇二年九月二十七日～十月三日号）

信者からの寄進は寺の改築・修繕や僧侶の衣食住などのために使われるが、その反対に寺か

ら信者への「寄進（「逆タンブン」とでも言おうか）も結構ある。僧侶は寺で学問をし、そして修行をするわけだが、その一方で寺は、地域住民のために橋をかけたり、学校を建てたり、衛生面の指導をしたり、森林を保護したりと、実に多くの活動をしているのだ。

寺に行くと募金箱が置いてあるのをよく目にするだろう。集まったお金は関連団体に直接渡すことになるが、そのほか、特別な奉仕活動を寺院内で行うこともある。

例えば、私が出家しているパクナム寺（バンコク）の献血活動は約三十年の歴史がある。一年に四回、寺の庭内でタイ赤十字の衣料スタッフが一人当たり三五〇CCの採血を行う。今年七月五日から七日にかけてこの献血が行われたが、三日間で二千七十四人の市民の協力を得ることができた。継続して参加する者も多く、この時は僧侶も積極的に献血する。

この献血活動はラジオでも報道されており、過去八年間、毎年九千人前後が参加している。なお、最も献血者が多かったのは三年前（仏暦二五四二年）で九千五百九十九人を記録した。（『一〇〇回記念誌』より）

同プロジェクトの代表である、パクナム寺のチャイ・キッサロー僧は「多くの人がこの献血活動に理解を示しています。今では献血だけでなく、眼球・骨・臓器の提供者も増えています。これまでに、寺で集めたお金で献血車を一台、タイ赤十字に寄贈しました。次回の献血は十月十一日から十三日まで行いますので、是非寺参りをかねてお越しください」と話している。

なお、十五年前、私がこのチャイ・キッサロー僧に初めて出会ったのは、献血基金のアピールのため来日した時のことだった。

ワットパクナムパーシーチャロアンについて

ワットパクナムの概要

ワットパクナム（ワットは寺）は、アユタヤ王朝時代（西暦一三五〇―一七六七）後期の十八世紀はじめトンブリー地域（パクナムとは「河口」の意味）の現在地（パーシーチャロアン）に建立されました。しかし当時の資料は現在見当たらず規模や陣容はわかりません。

その後、仏暦二四六〇（西暦一九一七）年にプラモンコンテープムニー（西暦一八八五―一九五九）が僧正になってから飛躍的にクローズアップされた寺となり僧侶数・施設そして教育・訓練内容が拡充されてきました。特にルアンポー（偉大な父）ワットパクナムとよばれる瞑想の理論と実践法は全国的に著名になりました。また、ワットパクナムの他の寺と異なった特徴は、規模以外に尼僧の大量受入れと養成、海外との交流や外国人僧の受入れと養成そしてパーリ語の教育の拡充発展もプラモンコンテープニー時代に行われています。

現僧正のソムデットプラマハーラチャマンカラチャーン（西暦一九二五年生まれ）は、前僧正の跡継ぎとしてますます拡充発展させタイ僧伽（サンガ）のマハーニカイ派の最高長老（ソムデット）を仏暦二四三八（西暦一九九五）年から務めております。僧正には仏暦二四〇八（西暦一九六五）年になっています。新たに加わっ

た社会的事業は、三十年以上にわたる当寺での献血活動で、タイ赤十字をはじめ多くの関連団体と信頼関係を築いています。これらを発展させた社会的事業に多く挑戦しています。

規模と陣容

僧侶数は入安居（あんごう）の日、仏暦二五四五（西暦二〇〇二）年七月二十一日で僧二六一名、少年（見習い）僧五三名、尼僧一四八名の合計四六二名です。寺院内には大きく八つの組織があり、担当は内容によって人数が決められています。副住職格の長老僧が八名いて責任体制が確立されています。いくつかの行事や企画には古参の僧が随時協力して行っています。

主な施設は、他の寺と異なり瞑想発展会館（ホーチュロンウッパサナー）、モンコンテープムニーを偲ぶ会館（ホーソンウエーチアニアモンコンテープニーラミッツ）、ルアンポー一〇〇歳記念場（アムソーン）、特別法身ビル（ツークピッセイタンマカーイ。図書館一階、美術館二階）、発展記念タンマ経典学校（ローンリエンプラプリヤッテイタンマタワナームサン）をはじめ他の寺と同様にあるウボソ（布薩堂、僧の礼拝堂）、プラタビドー（教典書庫）、サーラー（ホール、大食堂）、ウイハーン（仏堂）とウイハーンコー（信者の納骨所）、クティ（僧房）が大小十五棟、あります。そして広い駐車場や庭石が動物に似たのをあつめた庭園もあります。

ワットパクナムは運河に面しているのでワットパクナム港もあり、チャオプラヤ川からの船の交通手段は便利です。また、市内（4・9番）は、ここが終点なのでわかりやすいです。

瞑想（ウッパサナー）とプラモンコンテープムニー

毎日朝と夕の二回瞑想会が「瞑想発展会館」の二階で行われています。常時は、僧侶・尼僧・

信者の二〇〇名前後が参加しています。最大四〇〇名は収容可能で冷房も完備しています。

ほぼ三十分法話、三十分お経・三十分瞑想の一時間半です。土・日は、昼間二回、仏陀の日は、昼間一回追加されます。瞑想の効能は、精神の安定や洞察力が養われることから悟りまでの段階があり、続けることが大切です。プラモンコンテープムニーの理論は、呼吸法から始まります。イメージした水晶球を鼻から引き入れ臍（へそ）の真上までの七ステップで移動させ停止させる理論と実践法です。

寺の行事

年間行事は他の寺と特に変わる事はないです。マハーラハブーチャー（万物節、三・四月）、ウィサカブーチャー（仏誕節、六月）アッタミブーチャー（仏陀誕生日、六月）、アサラハブーチャー（三宝節、八月）の四大行事があります。また、毎月の新月と満月には戒律を確認する儀式の「パティモーク」があります。その他寺全体の参加行事以外には寺の支援協会主催の僧正の誕生日行事や尼僧会団体からの寄進の行事等が随時あります。

僧の一日

朝四時には起床のため寺の鐘がなります。六時前からサーラー（大食堂）で朝食、食事後布薩堂（礼拝堂）で朝の祈り。托鉢はワンプラ（仏陀の日）以外は認められていないのでサーラーで僧正以下一緒に食べます。信者からの寄進の受け取りや金銭での布施の感謝状交付も食事前後にサーラーで行われます。食後午前から学校に行く人、瞑想に行く人、自房で勉強する人がいます。そして最後の食事が十一時からの昼食で、すべてを十二時までには終わらないといけないのです。午後からも学校に行く人（仏教大

学や寺院内)、自房で勉強する人がいます。夕方五時からが夕の祈り。その後瞑想会に参加して一日が終わります。安居期間中は特別プログラムが加わります。また外出は祝賀・式典などの行事や昼の食事招待が多いです。個人的な用事もそれらの合間に行い、自分ですべてします。

出家

「得度式=ブアット」といって僧正や戒師などの参加によって審査されます。条件は、二十歳以上である、男性である、親の許可がある。債務がない、身体に障害がない、特殊な病気がない、などです。そのためのパーリ語のお経によって式がすすめられるので暗記が必要です。

ただ少年僧=見習い僧(ほぼ七歳から二十歳未満)は、条件が異なります。また、出家期間は決められてないのでいつでも還俗できます。

日本とワットパクナムとの交流

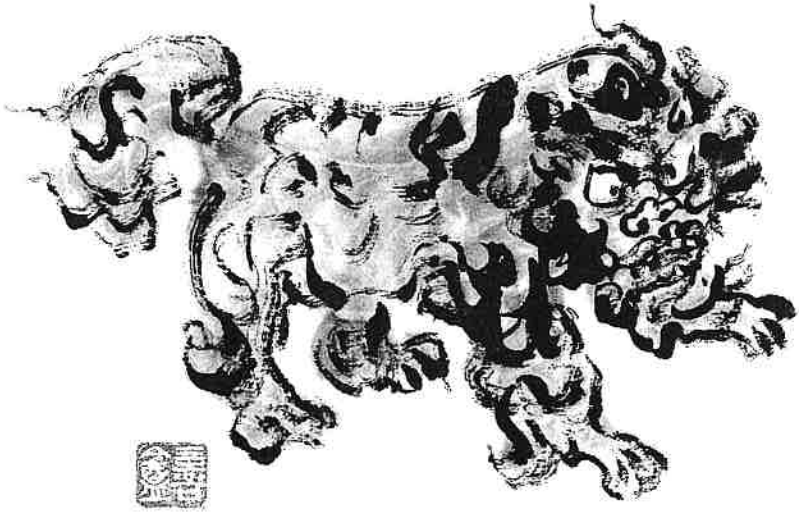
戦前から五十名以上の日本人が当寺で出家・修行しています。その後多くの国や寺そして分野で活躍しています。日本でも僧侶だった方からタイの仏教を勉強される方までいろいろです。

ワットパクナムで修行をする人のために審査をし、金銭面で支援している留学僧育英会(横浜・善光寺内)では既に一九八五(昭和六十)年から現在迄十四名を支援しています。また、真如苑(立川市)からワットパクナムへ涅槃像の寄贈(美術館に展示)があり信者の方がよく訪れています。当寺の運河側にタイ語・英語・日本語での寺の看板があります。

ワットパクナム日本別院

在日の一タイ人の寄進から始まった本格的タイ式寺院です。仏暦二五四二(一九九九)年十一月十四日に地鎮祭が行われ、仏暦二五四六(二

〇〇三）年春完成の予定です。

千葉県香取郡大栄町二九四―一（0478―73―8090）にウイハーン（仏堂）を建立しています。

現在二百二十七の戒律を守ったタイ人僧侶もおり、とくに在日タイ人が土・祝祭日には数多く訪れています。